



審査員のJAL社員の前で、分析や提案をプレゼンする高校生たち。

「この企画について、もう少し詳しく聞かせてください」「この機内食のコスト計算はしていますか」

審査を担当するのは、1年次の研修から海外探求研修時の搭乗までをフォローしてきた日本航空株式会社社員3名と、教諭1名の計4名。

「JALキャッチコピー」審査結果

1位

SAFETY COUNTRY ROAD ~安全な故郷への道~

2位

食で支えるJAL~働くあなたのために~

3位

夢の始まりへお届けします~安らぎのひとつと共~

特別賞

座席でできる体操動画プログラムの提供を提案



優勝グループはギターを弾きながらのプレゼンテーションで強い印象を残しました。

最優秀賞を受賞した生徒の声

キャッチコピーは、ターゲット層を日本に住んでいる外国人の方たちに絞ったことから思いつきました。「COUNTRY ROAD」とは、故郷を懐かしく思う気持ちを歌った世界的に有名な曲の名前で、私たちが考えたターゲット層にぴったりだと思いこの言葉を選びました。「SAFETY」という言葉は、JALさんの企業理念に込められている「世界一の安全性」という思いを強調したかったために選びました。私たちは、1年生の「企業研究」からJALさんのことについて学んできました。今回のプレゼンは、今までの総括でもありますが、JALさんへの恩返しでもあり、出来る限りのことをしようとプレゼンの方法にもこだわりました。考えた結果、ギターを使い実際に「COUNTRY ROAD」を弾くことに決めました。そうすることでキャッチコピーの印象を強く伝えることができると考えたからです。実際にJALさんへプレゼンをさせていただくという経験はとても貴重であり、今までの「企業研究」も含め、学んだことがたくさんありました。それらを生かし、将来につなげていきたいと思います。



ブランド戦略講座の後、海外探求研修時に利用したJALのホスピタリティについて分析し、それを踏まえてJALに提案を行うという実践的な課題解決型学習になっています。

グローバル企業にプレゼン。今年のテーマはキャッチコピー。

2017年度の「企業研究総まとめ」のメインテーマは「JALの

キャッチコピー」の提案。2018年2月21日に、JALへの提案を行うプレゼンテーションの授業が実施されました。生徒たちは実際に海外探究研修でJAL便に搭乗してわかったことを、グループごとに「機内食」「ホスピタリティ」「機内でのこと」「JALへの提案」の4つの視点から分析し、最後に広報のための「キャッチコピー」として発表します。

プレゼンテーションに

は、キャッチコピーとともに、なぜそのコピーを考えたのか、背景や分析結果も盛り込まれます。1グループ3分の持ち時間で、簡潔に要点を押さえながらも、楽器あり、踊りありと、それぞれに工夫を凝らした発表を行いました。

「スクール・フィロソフィの実践②」

「考えよ」。本気のプロジェクトが子どもたちを変える。

「考えよ」というシンプルかつ力強いメッセージを校訓とし、探究にフォーカスした取り組みを行っています。学びの中心に位置づけられているのは、総合的な学習と情報の授業を統合した課題解決型学習の「究タイム」。自ら課題を見つけ、関連する情報を収集・整理・分析し、そこで明らかになった考えをまとめ、表現することを目的とした学習プログラムです。

1学年から3学年前期までの2年半の間に段階的に学んでいくよう、工夫を凝らした「序」「論」「活」「究」「夢」の5単元のカリキュラムが設置されています。その中から、ビジネス探究科の「JAL研修」と、すべての探究科が取り組む「市役所プラン」を紹介します。

プロジェクト① ビジネス探究科 × JAL 「JAL研修」

2012年8月、日本航空に一本の電話が入りました。「日本航空を高校生の研修の対象にしたい。経営ビジョンの話をしてほしい」という富士市立高校の先生からの依頼でした。当時、JALは企業再建の真っ最中。一方、富士市立高校は富士市唯一の市立高校として、生き残りかけた授業カリキュラムの改変に取り組んでいるところでした。地域と密着しながら愛郷心を育んでいかなければ、地域から若者が流出してしま

まいます。そんな危機感を抱えていたからこそ、同様に再起を目指すJALから学びたい、学ばせたいと考えたそうです。

そんな富士市立高等学校の先生方の熱意に応える形で、JALの社員がJALフィロソフィによる破綻からの再生の取り組みを語ってくれることになりました(JALフィロソフィ講話・経営破綻から京セラ・稲盛和夫氏のJAL会長就任、再生までの過程と、再生に大きな役割を果たしたJALフィロソフィによる社員の意識変革について、「一人ひとりがJAL」「最高のバトンタッチ」など、いくつかのフィロソフィを例にしたから話をするもの)。

当初は一度きりの取り組みとして始まった研修ですが、現在は校外学習の一環として

て、1年次の「空港研修 航空研修」、2年次の「企業研究総まとめ」をJALがサポートし、2年間の取り組み全体を「JAL研修」と呼ばれるようになりました。「空港研修・航空研修」は、羽田の空港第一ターミナル、機体工場、客室訓練施設を見学し、JALフィロソフィ講話を聞く、東京での実地研修。「企業研究総まとめ」は、JAL



過去には機内食の提案がメインテーマだったときも。

取材・執筆/金井文宏(立命館大学稲盛経営哲学研究センターRITLABO代表)
谷口悦子(立命館大学稲盛経営哲学研究センターRITLABO担当)
松村淳(関西学院大学社会学部非常勤講師)
写真撮影/浜田智則



か？」審査員からは、現場に即した質問がどんどん投げかけられます。ビジネス探究科に学ぶ子どもたちに期待し、彼らから学びたいと考えるからこそ、遠慮なく向き合うことができるのでしょ。

人生で大切なマイルドや、考え方を届ける授業に。

今後の展開について富士市教育委員会の遠藤健先生は、「JAL研修全体を体系的にカリキュラムマネジメントする必要があると感じています。生徒がこの先の人生で本質として持つべきこと、テクニカルな部分だけではなく、マイルド的なことや考え方を一貫して伝えていく必要性を感じています。他社との比較も必要だと感じます。コスト面や会社組織、運営の課題や現状のビジョン等をインプットすることも必要です。ビジネスと社会貢献、持続可能な社会の形成といった切り口ももっと深



JAL社員からのメッセージを載せた掲示板

めていきたいです」と展望しています。子どもたちの分析や提案を、JALは真摯に受け止め、実現を検討し、その結果を学校に返しています。JALの社員のみなさんから返信されたメッセージは、学校の掲示板に貼り出されています。

プロジェクト② 総合探究科・ビジネス探究科 スポーツ探究科

× 富士市役所&地域コミュニティ

〈市役所プラン〉

企画研究課で探究学習主任を務めていた遠藤健先生は言います。「市役所プラン」を終えた子どもたちは、社会の仕組みが見えてきて、何か自分でできることはないかと考え、行動するようになります。自分の住んでいる所だけじゃなくて、もっと大きく社会全体のことを捉える視野が身についているように思います。」

プログラムは「オリエンテーションと事前学習」「調査と解決策検討」「発表と自己評価」の3つの単元に分かれています。第1単元ではまず、市職員としての役割や心構えを、座学を通じて理解し、具体的な地域の

課題について学習します。その後、子どもたちがグループに分かれて市内の10地区に入り、住民インタビューやフィールドワークを行います。ここで最も重視しているのは、地域に長く暮らす方々と密なコミュニケーションをとりながら、地域社会への主体的に関わる姿勢を身に付けることです。

第2単元では、先行事例の調査などを行い、地域課題の解決策を探ります。効果的なプレゼンテーションのやり方を学び、自分たちの取り組みを客観的に、かつきちんと人に伝えるというスキルも習得します。



地域のイベントで、提案した「てまんじゅう」を販売する高校生たち。



富士市民の案内でフィールドワーク。

地域コミュニティに 子どもたちを送り込む。

2学年の前半に実施する「市役所プラン」は、富士市役所からの辞令で始まる地域密着の体験型学習で

締めくくりの第3単元では、グループごとに練り上げた課題解決策をプレゼンテーションする探究学習発表会を実施。終了後には半期にわたる活動を振り返り、きちんと言語化できたかどうか、自己評価（リフレクション）を行います。

自分ごとになるから、 リアルな提案が生まれる。

コミュニティハイスクールを指す富士市立高等学校にとって、今や中核となる取り組みの一つとなった「市役所プラン」ですが、導入当初はなかなかうまくいかなかったそうです。「富士市の各課に子どもたちを割り振って所属させたのですが、組織は縦割りですし、市役所の職員も忙しく相手になる時間を十分に取れなくて、それで結局、子どもたち自身に、地域の課題を発見させて取り組んでもらうようにしました。」

その結果、生徒から地域に即したリアルな提案が出されるようになりました。例えば市内西部の天間地区の認知度を高め、地区の活動に参加する若者を増やすために「てまんじゅう」をつくることを提案したグループは、住民とともにまんじゅうを作ってお祭りでふるまい、多くの参加者から喜ばれました。また、防

from JAL



日本航空株式会社
本店エリア販売部
第3販売グループ
グループ長
西川 光輝さん

「提案を受け止め、担当部署につないでいます」

生徒のみなさんがこの経験を通して社会を知ることには意義があると考え、授業づくりに協力させていただいています。そして、生徒さんたちの分析や提案は、担当部門につないでいます。受け取った社員もこの取り組みには非常に興味を持ってくださっているんですよ。ただ、安全の確保やスペースが限られていることなどから、どうしても実現には制限が出てきます。そのため、実現が難しい提案については、「こういったご意見をいただきましたけれど、実はこういったことで取り組めないんです」というお返事もできるだけするようにしています。

from 富士市立高等学校



富士市教育委員会
富士市立高等学校
教育推進担当
指導主事
遠藤 健先生

富士市立高等学校では、1年次は「日本の大企業や、先進的な企業を知ろう」、2年次は「外を見よう」、3年次は「自分たちで組み立てよう」ということで、3年間の「企業研究」を計画しています。今年度取り組んだ「キャッチコピーを考える」という切り口は、会社の運営側の気持ちになり、自分事として、会社をとらえてほしい、という思いが込められています。JAL研修は4年前より実施していますが、世界でトップクラスのサービスを提供しているグローバル企業のJALさんが、向上心や謙虚な気持ちを持ち続け、とても丁寧に接して下さる。その姿勢は生徒たちに、よく伝わっていると思います。



約80人の市民の皆さんを招いての中間発表会。

災害公園にかまどベンチを設置することを提案したグループは、防災訓練に自主的に参加しています。遠藤先生は次のように総括します。「自分ごととしてテーマが立てられると、思いがそこに乗っていく。思いが加われば、それが愛郷心につながったり、生徒も本気になっていきます。当初、地域住民からは、ホームページやチラシづくりを手伝ってくれるボランティアのように受け止められていましたが、学習の一環であることを伝え、彼らの興味や関心に沿ったプロジェクトとして協力してもらっています。街全体で生徒を育てる。地域に根差した市立高校だからこそ、このような取り組みが大切だと考えています」